

小児・児童期における家庭の食事環境がその後の親子関係に及ぼす影響

後藤 紀子⁴⁾・矢澤 久史・大澤 香織

SUMMARY

Hirai & Okamoto (2006) suggested that congenial atmospheres in the past domestic eating environments influenced current parent-child psychological connection. This study was intended to investigate how children regard domestic eating situations as congenial, and re-examine the effect of congenial atmospheres in childhood eating environments on current parent-child psychological connection in Japanese undergraduates.

As the results of using exploratory factor analysis, three factors (“good material environment”, “good state of family relationship”, “reception”) adopted as conditions when children regard domestic eating situations as congenial. The results of using multiple regression analysis suggested that frequency of conversation may influence current father-child psychological connection, and that congenial atmospheres may influence current mother-child psychological connection. Furthermore, the results of this study indicated that good state of family relationships in childhood eating environments have the most effect on current mother-child psychological connection. The results also showed that feeling of being accepted by family members at the table tend to influence current mother-child psychological connection. Implications of this study for parent-child relationships were discussed.

はじめに

共食とは

食は、人間だけがなす行為といっても過言ではない。人間以外の生物は栄養を摂取しているにすぎないが、人間は食という行動を通じてさまざまな感情（楽しみや喜び、悲しみ、怒りなど）を体験している。体験された感情は、食事を共にすると分かち合うことができる。例えば、お互いに目の前にある食べ物を手やフォークや箸によって口の中に入れ、咀嚼し、喉を鳴らす。食べた物を「おいしい」と感じたのであれば、食を共有した人に対して「おいしいね」と笑顔を向ける。そうすると相手からも「おいしいね」と笑顔を返してくる。このような食の体験によって、人間は他者との関係を築き、深めていくことができる。つまり、人間にとって食は単なる栄養摂取ではなく、対人関係を築き、深める上で有用なコミュニケーションツールの1つであるといってもよいだろう。

このように、一連の食行為の共有によって人間関係を少しずつ深めることを「共食」という（池上・岩崎・原山・藤原，2008）。もともと人類学や民族学の概念である共食は神と人との共同の食事を指す言葉であるが、現

在では人と人が食事を共にすることの効用を説明する上で多く用いられている。

家族形態の変化に伴う親子関係の希薄化

古代から人間は食物を共有・共食し、食行動を通して人と関わり合っていく特徴を持っており、その共食の相手や場として「家族」という社会単位を生み出したと考えられている（山極，1997）。しかし、現代社会において家族は大きく変化し、「核家族」、「核分裂家族」、「ホテル家族」などさまざまな家族形態が出現してきた。また、両親の共働きが一般化し、親の家事従事時間が減少したことに伴って、食事にかかる時間や食事の内容にも影響が現れている。さらに子どもの塾通いなどにより、家族1人ひとりの生活利用時間がまちまちになるなど、食卓をめぐる状況が大きく変わってきた。食卓を囲ってなされてきた家族間のコミュニケーションや団欒の取り方、しつけにも変化が生じてきている。

同時に、核家族化が増えて家族の構成人数が少なくなったにもかかわらず、親子関係は深くなるばかりか、むしろ希薄化している。国民生活白書（内閣府，2007）において、親子関係の希薄化に親の労働環境が大きく関わっていることが指摘されている。父親の労働時間が長

く、働き盛りの男性の約3割が「家族と過ごす時間が十分ではない」と感じており、実際に同居家族と過ごす時間が短い者の割合が高まっている(内閣府, 2007)。また、「家族と一緒に過ごす時間が取れている」ことが生活満足度を高めることが報告されており(内閣府, 2007)、家族と過ごすことが難しい現代の事情を浮き彫りにする結果となった。したがって、この現代社会において「家族と食卓を囲むこと」がいかなる意味を有するかを再考し、家族での共食を促進することが、希薄化した親子関係の再形成に重要な役割を果たすと考えられる。

親子関係と食事との関係

これまで、親子関係と食事の関係はさまざまな観点から検討されてきた。滝川(1991)は子どもの心の発達について、食を軸に次のように考察している。乳児期は養育者の胸に抱かれて授乳される。そこで大人との重要な交流がなされ、養育者との絆を築きつつ社会的・文化的な精神世界へと参入していく。やがて離乳によって、子どもは「家族の食卓に参加する」ことを始める。幼児期は一人で食事ができるようにしつけがなされ、初めて社会的・文化的な規範を経験して身につけていく。学童期になり共同生活へ参加するようになると、家族での食事を離れ、給食などによって社会のより広い共同性やルールを身につけることが要求される。そのため、家庭での食卓で安心感や満足感を体験できることが児童の社会的発達に重要となってくる。さらに、青年期に入ると食事場面は対人関係的、心理的な場という意味合いが色濃く意識されるようになる。

また、大谷・中北・饗庭・康・富田・南出(2003)は、大学生の「自我同一性形成を促し、人格全体の発達に関わる総合的概念である独立意識」に、家族を中心とした食にまつわる過去の体験が深く関わっていることを明らかにした。現在推進されている食育も「乳幼児から思春期まで」の時期を重視している。

さらに、平井・岡本(2006)は大学生を対象に、過去の食事場面が現在の親子関係に及ぼす影響を検討している。子どもが抱く親への愛情・理解・信頼の認知、および親からの愛情・理解・信頼の受けとめを「心理的結合性」と定義し、父との心理的結合性(父子結合性)と母との心理的結合性(母子結合性)に過去の食事環境がどのように影響するかを検討した結果、食事場面における「雰囲気良さ」が親子の心理的結合性を強めることが明らかとなった。この結果から、青年期前期に体験してきた食事場面の雰囲気が、親子関係を見つめなおす時期である大学生(青年期後期)と親との心理的結合性の

強さに影響することが示唆された。小・中・高校生を対象とした調査においても(川崎, 2001; 平井, 2003; 平井・岡本, 2005)、食事場面の雰囲気が親子の心理的な結びつきを強める上で重要であることが示唆されている。

以上の結果を照合すると、過去の食事場面の雰囲気がその時期の親子関係だけでなく、後の親子関係においても影響を及ぼすことが考えられる。しかし、食事場面の雰囲気は、食事の質や相互交流のはかられ方、しつけ・マナーなど、さまざまな面が全体的に関連して生じる要因であり、食事場面の雰囲気の良さが何によって規定されるかは明らかにされていない。

本研究の目的

本研究では大学生を対象に、小児・児童期の食事場面において「雰囲気が良い」と認知される要因を検討し、その結果を踏まえて、食事場面における雰囲気良さがその後の親子の心理的結合性に及ぼす影響について再検討する。小児・児童期にある子どもが何をもちて食事の雰囲気を良いと判断するかを明らかにすることは、親子関係の希薄化を抑止する上で重要であるといえ、さらにその後の親子の関わり方、子どもとの関わり方の持ち方に有用な情報を提供できると考えられる。

なお、本研究では平井・岡本(2006)にならい、父親および母親との心理的結合性を「親に対する愛情・理解・信頼の認知、および親からの愛情・理解・信頼の受けとめ」と定義する。

方法

調査対象者

調査対象は東海地方の私立四年制大学に通う学部学生であった。本研究では父親と母親の両者に対する子どもの心理的結合性を扱うため、父子・母子のみの家族形態を除いた147名(男性35名、女性は112名、平均年齢は 19.50 ± 1.20 歳)を分析対象とした。有効回答率は75.30%であった。

調査時期

調査は2008年10月下旬から11月上旬に実施した。

調査材料

①父親および母親との現在の心理的結合性に関する項目(各7項目)

平井・岡本(2003)によって作成された心理的結合

性に関する項目（計7項目）を用いた。各項目は「非常に当てはまる」（5点）～「まったく当てはまらない」（1点）の5件法で評定され、現在の父親との心理結合性、現在の母子結合性（以下、それぞれ父子結合性、母子結合性と記す）に対する得点をそれぞれ集計した。

②小児・児童期の食事場面の状況に関する項目（21項目）

平井・岡本（2005）が家庭の食事場面に対する意識・態度を再考し、作成したものをを用いて、中学生以前の家庭での食事場面の状況について尋ねた。「料理への配慮」、「料理の簡便性」、「相互交流」、「しつけ・マナー」「会話頻度」、「雰囲気よさ」の6下位尺度で構成されており、各項目は「非常に当てはまる」（7点）～「まったく当てはまらない」（1点）の7件法で評定された。

③食事場面における会話頻度（6項目）

父親と本人、母親と本人、および父親と母親の会話頻度について尋ねた。各項目は「非常に当てはまる」（7点）～「まったく当てはまらない」（1点）の7件法で評定された。

④食事場面における雰囲気の良さを規定する項目（22項目）

東海地方の私立四年制大学に通う学部学生数名に、過去の食事場面において「雰囲気が良い」と認識した条件について口頭で説明し、自由記述によって得られた内容を整理した。その結果、得られた22項目を採用した。各項目は「非常に当てはまる」（5点）～「まったく当てはまらない」（1点）の5件法で評定された。この22項目以外に雰囲気の良さを規定すると感じる要因があれば、調査対象者に自由記述で回答を求めた。

⑥基本属性

性別、年齢、学年、所属学科、家族形態、居住形態について尋ねた。

手続き

調査用紙は講義開始時、もしくは終了直前に、講義担当者の許可を得て配布・回収した。なお、教場にて調査者から調査の目的を書面で示した。口頭では以下のように説明した。「この調査は、過去の食事場面に関する心理学的研究を目的に行われております。この調査でお答えいただいた内容はすべて統計的に処理され、個人情報外部に漏れることや研究の目的以外で使用されることは一切ございませんので、安心してお答え下さい。また、本調査への回答は強制されるものではございません。万が一、質問紙に回答している間に気分が悪くなった場合は、すみやかに回答を中断してください。この調査について、ご不明な点がございましたら、研究実施者または下記連絡先までご連絡ください。宜しくお願いいたします。」

以上の説明を行い、調査協力に同意した者のみ調査用紙を回答・提出するように求めた。調査用紙の回収は原則、次の週の講義開始時もしくは終了時に行った。

分析方法

分析対象となった147名の回答データを統計処理した。統計処理には解析ソフトSPSS 14.0J for Windowsを用いた。

結果

調査対象者の家族形態・居住形態

家族形態は核家族が76名（51.7%）、拡大家族が68名（46.3%）、その他が3名（2.0%）であり、居住形態は一人暮らしが32名（21.7%）、自宅が101名（68.7%）、寮生活が10名（6.8%）、不明が4名（2.7%）であった。

親との心理的結合性と基本属性の関連について

親子関係を見つめなおす時期である青年期後期の大学生の親子関係において、男性よりも女性の方が母親の結びつきが強い傾向にあることが指摘されているが（平井・岡本、2006）、性を要因とする一要因分散分析の結果、心理的結合性に性差は認められなかった。同様に、家族形態、および居住形態それぞれを要因とする一要因分散分析の結果、心理的結合性に有意な差は見られなかった。

食事場面における雰囲気の良さを規定する要因について

小児・児童期における食事場面の雰囲気の良さを規定する項目22項目のデータについて、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値落差を考慮し3因子を基準とした。分析の結果、いずれの因子においても十分な負荷量（.40）を示さなかった8項目が除外され、3因子14項目が抽出された。各因子の項目、回転後の因子負荷量および α 係数をTable 1に示した。各因子の α 係数は.85～.87の間にあり、高い水準の内的整合性が認められた（Table 1）。

第Ⅰ因子は「食事をする場所が清潔な感じがする」、「台所が清潔な感じがする」、「照明の明るさがちょうど良い」、「イスなどの座り心地がちょうど良い」、「食器のセンスが良い」、「各自の食器がある」の6項目からなっており、これらの内容から「物質的環境の良さ」と命名した。

第Ⅱ因子は「自分の話に興味を持ち聞いてくれる」、「自分の話が受け入れられる」、「共通する話題がある」の3項目からなっており、これらの内容から「受容されやすさ」と命名した。

Table 1 食事場面における「雰囲気の良い」を規定する条件に関する因子分析の結果(最尤法・プロマックス回転)

質問項目 ($\alpha=.88$)	抽出因子		
	I	II	III
I. 物質的環境の良さ ($\alpha=.85$)			
15 食事をする場所が清潔な感じがする	.87	-.16	.04
16 台所が清潔な感じがする	.83	.15	-.18
17 証明の明るさがちょうど良い	.77	.16	.00
18 イスなどの座り心地がちょうど良い	.73	.18	-.08
20 食器のセンスが良い	.60	-.13	.10
19 各自の食器がある	.45	-.27	.27
II. 受容されやすさ ($\alpha=.87$)			
1 自分の話に興味を持ち聞いてくれる	-.10	.89	.10
3 自分の話が受け入れられる	-.03	.87	.07
2 共通する話題がある	.07	.61	.08
III. 仲の良さ ($\alpha=.85$)			
22 食事最中にはにぎやかだ	.16	-.10	.75
8 家族の仲が良い	-.13	.10	.75
6 笑顔がある	.01	.23	.70
7 自然にふるまえる	.13	.22	.51
5 同じテレビを見て感想を言い合える	-.02	.19	.48
因子相関行列			
I.	1.00		
II.	.33	1.00	
III.	.44	.63	1.00

Table 2 食事場面の状況に関する各下位尺度得点と父子・母子結合性の各得点間の相関係数

	料理への配慮	料理の簡便	相互交流	しつけ・マナー	会話頻度	雰囲気の良い	父子結合性	母子結合性
料理への配慮	1.00							
料理の簡便	-.50**	1.00						
相互交流	.44**	-.26**	1.00					
しつけ・マナー	.22**	-.12	.37**	1.00				
会話頻度	.46**	-.22**	.52**	.24**	1.00			
雰囲気の良い	.54**	-.27**	.53**	.18*	.71**	1.00		
父子結合性	.27**	-.03	.21**	.00	.49**	.43**	1.00	
母子結合性	.32**	-.12	.38**	.15	.46**	.56**	.43**	1.00

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 3 親との心理結合性を基準変数, 食事場面の諸要因を説明変数とした重回帰分析

説明変数	父子結合性 ($n=147$)		母子結合性 ($n=147$)	
	β		β	
料理への配慮	.10		.03	
料理の簡便性	.13		.07	
相互交流	-.07		.09	
雰囲気の良い	.18		.46***	
しつけ・マナー	-.11		.02	
会話頻度	.41***		.09	
R^2	.29		.34	
調整済み R^2	.26		.31	
F値	9.59***		11.82***	

*** $p < .001$

第III因子は「家族の仲が良い」、「食事最中にはにぎやかだ」、「笑顔がある」、「自然にふるまえる」、「同じテレビを見て感想を言いあえる」の5項目からなっており、これらの内容から「仲の良さ」と命名した。

Table 4 食事場面の雰囲気を規定する条件の各得点間の相関係数

	受容されやすさ	仲の良さ	物質的環境の良さ
受容されやすさ	1.00		
仲の良さ	.67**	1.00	
物質的環境の良さ	.28**	.43**	1.00

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 5 母子結合性を基準変数, 食事場面の雰囲気の諸要因を説明変数とした重回帰分析

説明変数	母子結合性 ($n=147$) β
受容されやすさ	.23 [†]
仲の良さ	.40**
物質的環境の良さ	.06
R^2	.42
調整済み R^2	.36
F値	6.79***

[†] $p < .10$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

小児・児童期の食事場面の諸要因と親との心理的結合性の関連

父子結合性, 母子結合性に影響を及ぼす食事場面の諸要因を検討するために, まずは父子・母子結合性の各得点および食事場面の状況に関する各下位尺度の得点間において, ピアソンの積率相関係数を算出した (Table2)。Table2に示したとおり, 「会話頻度」と「雰囲気の良い」やその他の下位尺度に有意な相関が認められた。

続けて, 父子結合性, 母子結合性それぞれを従属変数とし, 食事場面の諸要因を独立変数とし, 強制投入法による重回帰分析を行った。その結果をTable3に示した。なお, 説明変数間に有意な相関が認められたが (Table 2), 各説明変数の分散拡大係数 (variance inflation factor: VIF) の値はすべて10よりも小さかったことから (早川, 1986), 多重共線性の問題は回避されると判断した。Table3に示したとおり, 各基準変数における説明変数の重決定係数 (R^2) は有意であり, 父子結合性

には「会話頻度」が影響し、母子結合性には「雰囲気の良い」が影響することが示された。

食事場面の雰囲気の各条件が母子結合性に及ぼす影響

母子結合性に「雰囲気の良い」が最も説明力を有するという結果から、母子結合性に食事場面の雰囲気の諸要因がどのように影響を及ぼすかを検討した。食事場面の雰囲気を規定する条件の各得点間において相関分析を行った。その結果をTable 4 に示した。Table 4 に示したとおり、すべての条件間において有意な相関関係が認められた。

続けて、母子結合性を従属変数とし、雰囲気の良いを規定する諸要因を独立変数とし、強制投入法による重回帰分析を行った。その結果をTable 5 に示した。VIF値はすべて10よりも小さかったことから、多重共線性の問題は回避されると判断した。Table 5 に示したとおり、各基準変数における説明変数の重決定係数 (R^2) は有意であり、母子結合性に影響を持つ雰囲気の条件は「仲の良い」が大きな説明力を有し、「受容されやすさ」は説明力を有する傾向にあった。

考 察

本研究では大学生を対象に、小児・児童期の食事場面において「雰囲気が良い」と認知される要因を検討し、その結果を踏まえて、食事場面における雰囲気の良いがその後の親子の心理的結合性に及ぼす影響について再検討することを目的とした。まず「雰囲気が良い」と判断される要因について検討し、自由項目によって収集された22項目から因子分析によって「物質的環境の良さ」、「受容されやすさ」、「仲の良い」の3因子14項目が抽出された。また、 α 係数の値から高い水準の内的整合性が認められた。

また、平井・岡本 (2006) に基づき、食事場面の諸要因である「料理への配慮」、「料理の簡便性」、「相互交流」、「雰囲気の良い」、および「会話頻度」と、大学生が認知した父親および母親との心理結合性との関連について、重回帰分析を用いて再検討した。その結果、父子結合性に説明力を有していた食事場面の要因は「会話頻度」であった。小学生を対象にした研究から(平井・岡本, 2003), 父親も母親も食事場面は子どもとよく会話ができる場として認知していること、会話頻度が父子結合性および母子結合性に関連することを明らかにし、会話の重要性が指摘されているが、小児・児童期における食事場面での会話頻度がその後の父子結合性に影響すること

が本研究から示された。小学4年生から中学3年生の父親は、子どもとの接触時間や子どもの理解度が母親より少ないことを認識していることが報告されている(内閣府, 2001)。父と子が食事場面で頻繁に会話を図ることは、小・中学生の時期のみならず青年期後期の父子関係にも影響を及ぼす可能性があり、青年期を通じた父親と子どもの関係において重要な食事場面のあり方であることを示唆している。

ところで、本研究において小児・児童期の食事場面での雰囲気の良いを規定する要因について対象者に自由記述を求めたところ、良いと感じた要因に「家族全員が集まる時間だったので楽しかった」、「生活していて一番家族と接する時間だから」、「唯一家族が集まるから」といった回答が得られた。一方、食事場面の雰囲気が悪かった要因に関する自由記述もあったため、その内容を見てみると、「家族がそろわなかったため」といった回答が見受けられた。家族が関わり合う機会が食事以外に少なく、特に仕事で家にいる時間が少ないとされる父親と会話する機会として、食事場面が重要な時間であることが自由記述の内容から推測される。

続けて、母子結合性において大きな説明力を有していた食事場面の要因は、平井・岡本 (2006) と同様に「雰囲気の良い」であった。この結果から、食事場面の雰囲気の良いと母子結合性との関連性が大きいことが本研究からも指摘される。母子結合性において大きな説明力を有していた「雰囲気の良い」の条件を検討するため、母子結合性を従属変数とし、本研究で得られた雰囲気の良いを規定する諸要因を独立変数とする重回帰分析を行った。その結果、「仲の良い」が大きな説明力を有し、「受容されやすさ」は説明力を有する傾向にあった。「仲の良い」を構成する項目から、笑顔があること、自然にふるまえることなど、子どもが食事場面を楽しんでいる姿が伺える。また「受容されやすさ」を構成する項目から、自分の話に興味を持ち聞いてくれる、自分の話が受け入れられるなど、母親が子どもを温かく受容し、子どもが母親に対して安心感をもち、積極的に話ができる環境を提供することが母子結合性の強さに影響すると考えられる。

また、過去の食事場面の雰囲気を良いと感じた要因に関する自由記述から、「母が隣に座っていて落ち着いた。自分に気を配ってくれた」や「話している時が多かったが、話さなくても一緒にいると落ち着いたため」など、食事時の母親の存在が子どもにとって「落ち着く」効果をもたらすことを示唆する回答が多く見受けられた。したがって、母親が子どもに安心感を持ってもらえるような食事の雰囲気をつくるように心がけることが、母子結

合性を高めることにつながると考えられる。

本研究のまとめ

本研究から、家族で食事をする機会が多い小児・児童期の食事のあり方が、青年期後期にあたる大学生と親との心理的結合性に関連することが明らかになった。さらに、食事場面の雰囲気の規定する要因を検討し、「仲の良さ」と「受容されやすさ」といった、子どもが母親に対して安心感を持てる食事場面を築くことが重要であることが示唆され、食事場面の雰囲気という曖昧なものを向上させる可能性を見出すことができた。

本研究では、食事場面において父子間には「会話頻度」が、母子間には「雰囲気の良さ」が親子の心理的結合性に影響力を持つという結果となった。父子が食事場面で頻繁に会話をはかるとは、小中学生の時期のみならず青年期後期の父子関係にも影響を及ぼす可能性があり、青年期を通じた父親と子どもの関係において重要な食事場面のあり方であると考えられる。しかし、過去の食事場面を悪かったと感じた要因について、「食事＝説教だった」と記述した者もいたことから、会話の質が大きな影響を持っていることが考えられ、父親と子どもの会話頻度をただ増やすのではなく、会話の質を考慮しなければならないだろう。また、母親においては、食事場面において子どもがそのままいられる安心感を持つことができる雰囲気をつくることを心がけ、普段から子どもをよく知ることが求められるだろう。

食事場面は子どもの発達段階に関わらず、家族の凝集性が他の生活場面と比較して比較的高いこと、また生理的欲求の充足と親子の二者関係を同時に強く感じられる場である（伊東，2005）。その場では、父子、母子の関係は個々のものではなく、相互に影響しあっており、各自の関係が双方に反映されると考えられる。したがって、父子結合性・母子結合性を高めるためには父親と母親の相互の協力が不可欠であると推測される。食事場面以外の生活場面で、夫や子どもとの個々のコミュニケーションでの相互の情報提供を母親が受け持ち、普段接することの少ない父親と子どもの緊張のほぐし、楽しく食事を過ごすことが、家族という共同体の一体感を生み、親子の心理的結合を高めることにつながると考えられる。

なお、本研究の限界として、他の生活場面での接触頻度と食事場面での親子の接触頻度を考慮していないことや発達段階による検討がなされていないことが挙げられ、今後検討する余地があるだろう。また、対象者の数が少なく、かつ一地方大学に限定されているため、幅広

く対象者を募り、結果の一般化をはかる必要もある。さらに、本研究は現在から過去にさかのぼって調査するレトロスペクティブ研究であった。食事場面と親子の心理的結合性の関連が頑健であることを明らかにするためには、縦断的研究が必要とされてくるだろう。

引用文献

- 早川 毅 (1986). 回帰分析の基礎 朝倉書店
- 平井滋野 (2003). 親との心理結合性と食事場面の諸側面との関連性 青年心理学会第11回大会発表論文集, 24-25.
- 平井滋野・岡本裕子 (2005). 小学生の家庭における食事場面の諸要因と父親および母親との心理的結合性の関連 日本家政学会誌, 56, 273-282.
- 平井滋野・岡本裕子 (2006). 家庭における過去の食事場面と大学生の父親および母親との心理的結合性の関連 日本家政学会誌, 57, 71-79.
- 池上甲一・岩崎正弥・原山浩介・藤原辰史 (2008). 食の共同体 ナカニシヤ出版
- 川崎未美 (2001). 食事の質、共食頻度、および食卓の雰囲気か中学生の心の健康に及ぼす影響 家政誌, 52, 923-935.
- 内閣府 (2007). 国民生活白書 つながりが築く豊かな国民生活 時事画報社
- 内閣府 (2001). 青年の生活と意識 青少年の生活と意識に関する基本調査報告書 第2回調査 独立行政法人国立印刷局
- 大谷貴美子・中北理映・饗庭照美・康 薔薇・富田圭子・南出隆久 (2003). 家庭における食生活体験が青年期後期の自己独立性に及ぼす影響 日本食生活学会誌, 14, 14-27.
- 滝川一廣 (1991). 表象としての食卓シリーズ変貌する家族4家族のフォークロア 上野千鶴子・鶴見俊輔・中井久夫・中村達也・中田 登・山田太一(編) 岩波書店 pp. 83-101.
- 山極寿一 (1997). 食のホミニゼーション 行動科学研究, 36, 25-31.

参考文献

- 深谷昌志 (1983). 孤立化するこどもたち NHKブックス
- 石毛直道 (1982). 食事の文明論 中央公論社

註

- (1) 第1著者は東海学院大学人間関係学部心理学科の卒業生である。本論文は第1著者の平成20年度東海学院大学人間関係学部心理学科卒業論文の内容を修正・加筆したものである。

謝 辞

本論文の作成にあたり、調査にご協力いただきました学生の皆さんにこの場を借りて厚く御礼申し上げます。